

# 好きな映画について考えてみました。

外国語学部 中国語学科3年 常守 純奈

私は映画を観るとき、そこに自分らしい時間を求めます。携帯電話を機内モードにして腕時計を外すのが習慣で、現実世界から少し離れる準備をします。好きなミルクティーを飲みながらその映画の世界に吞まれる時間は友達とおしゃべりをしたりおいしいものを食べたりするのとはまた違った楽しみの時間です。

観賞して元氣や幸せをもらえ心地よくなる作品はまた観たくなります。私にとってその好きになった世界観を思い出す鍵となるものは音楽であることが多いように思います。今回は私のお気に入りの映画の中でも音楽の印象が強く残った三作についてお話ししたいと思います。

## ① アバウト・タイム

〜愛おしい時間について〜 (2013年九月)

主人公が過去へタイムトラベルを繰り返して、人

生をより良いものに変えていく姿を描く物語「アバウト・タイム」愛おしい時間について〜。成功や家族のためにタイムトラベルを使う日々の中で、主人公タイムが幸せの秘訣を見つけていくという作品です。

イギリスに住むタイム(ドナル・グリーソン)は二十一歳になった年に父親から一族の男性はタイムトラベルをすることができると伝えられます。それを知ったタイムはまず彼女を作るため能力を使い奮闘しますが恋は実らず失敗。そんなある日、友達に連れて行かれた暗闇レストランである女性と意気投合。チャーミングな女性、メアリー(レイチェル・マクアダムス)に出会います。二人は惹かれあい、連絡先を交換します。しかし同じ時間に起こっていた同居人の一大事をタイムトラベルして救うとタイムの携帯電話からはメアリーの番号が消え、二人の出

会いは無かったことになってしまっています。

この作品を観て最初に感じたのは画の温かさです。どこか懐かしさを感じる淡い色合いで思わず静止画として残しておきたいと思ってしまう。登場人物や風景が作品の色や温度を帯びて美しく表現されています。また全体的に優しい色合いの世界観の中で、妹キットカットの好きな鮮やかなパープルが画のアクセントになっているのもちょっとしたポイントなのではないでしょうか。

温かいのは画だけではなく登場人物たちも同じです。彼らはまたとても個性豊かで、ちょっと冴えない主人公をはじめ、妖精のようで自由な性格の妹、抜けているけど憎めない親友など魅力的なキャラクターばかりです。その中でも私のお気に入りの本作のヒロインであるメアリー。メアリーを演じるのは「きみに読む物語」



や「ミッドナイト・イン・パリ」にも出演するレイチェル・マクアダムスです。どんな役を演じても観客を引き込む演技力と愛らしい笑顔が魅力的な私の好きな女優さんの一人です。彼女が演じているからこそ登場人物だけでなく観客の私たちまでメアリーにあってという間に心掴まれてしまうのではないかと思います。メアリーは出版社で働くという知的な面を持つ傍ら、大好きなモデルのケイト・モスの話になるとつい熱が入ってしまうようなチャーミングな女性です。作中で彼女の優しい人柄がよく表現されていると感じたのが台風の中で挙げた結婚式でのワン

シーン。タイムの「雨の日で後悔してる？」との問いにメアリーは「私たちの人生も同じよ。いろんな天気があるわ。楽しんで！」と前向きに捉え答えています。自分を飾らず周囲の人々にまっすぐな愛を注ぐメアリーはタイムと共にこの映画のメッセージをより鮮麗に伝えてくれます。

作品の中の重要なシーンではテーマ曲である「The About Time Theme」が流れます。暗闇レストランから出て初めてメアリーの姿を見た時や新しい家族ができた時など、タイムにとってかけがえのない「時間」であることを表すこの演出が私はとても好きです。何度も作中からかかるとで良い意味で中毒のようになり観終わった後も耳に残ります。またテーマ曲以外に挿入歌も多数あります。写真展でメアリーと再会できるのをひたすら待つシーンでは「Friday Im In Love」、タイムとメアリーが結ばれてからの日常を描く場面では「How Long Will I Love You」という曲でタイムの想いが表現されていたり、他にも楽曲を使って素晴らしい日々をかみしめる様子が語られたりする点はこの作品の大きな魅力です。

作品を通じて最も印象に残ったシーンはタイムが父親から幸せになるための秘訣を教わり実践する場面。告げられた秘訣パート1とパート2を行ってみて、普段一日を過ごす中で緊張や不安のために見過ぎてしまっていた人生の素晴らしさに気づいていきます。そして何気ない生活を楽しめることができるようになったタイムは幸せになるための秘訣パート3を自ら見つけ

ます。秘訣パート3はこの作品からタイムトラベルできない私たちへのメッセージでありエールなのだと思います。（写真：映画「アバウト・タイム」愛おしい時間について「オフィシャルサイト <http://abouttime-movie.jp/>）

## ② RENT (二〇〇五年十一月)

始まりも登場人物の台詞の多くも歌で構成され物語が展開されていくミュージカル映画「RENT」。人気ブロードウェイミュージカルをオリジナルキャスト数名が演じ映画化した作品です。

十二月二十四日に映像作家のマーク（アンソニー・ラップ）がビデオを回し始め、アーティストの仲間たちと過ごし彼らと共有する時間を撮影しながら映画を作り終えるまでの約一年間の物語です。エイズやドラッグ、同性愛、差別などを題材としつつ、ロックミュージックを基調とした音楽で若者たちが今日を生きるために奮闘する姿を描いています。

エネルギー豊かな楽曲たちに圧倒されてから何度かこの映画を鑑賞しましたが、今回この映画について書くかと考えてから映画の元となっている舞台についても気になり、映画上映の三年後に行われたブロードウェイでのラスト公演を収録した「RENT filmed LIVE on Broadway」[https://en.wikipedia.org/wiki/Rent:\\_Filmed\\_live\\_on\\_Broadway](https://en.wikipedia.org/wiki/Rent:_Filmed_live_on_Broadway)を鑑賞しました。映画ではカットされていたシーンや音楽もあり

「RENT」の世界の新しい一面をのぞき見た気分になりました。映画を観ただけでは分からなかった登場人物の背景が見えてきたりブロードウェイでのラスト公演ならではのキャストと観客の愛が伝わってきたりとこちらも魅力あふれる内容でした。そこで今回は舞台のDVDを比較材料として加えます。

映画は主要キャラクターたちが歌う「Seasons Of Love」から始まります。以前キンビバレッジのCMに起用されていた為この曲を耳にしたことがある人は多いのではないのでしょうか。飾り気のないステージの上で「一年をなにで計ろう」「愛はどうだろうか」と歌うこの曲聴くと初めて観たときは「RENT」の世界観に引き込まれ、二回目以降は登場人物たちの人生や思いが蘇ってきて懐かしさを感じてしまいます。この曲は他の場面でも何度か流れ、観客は彼らと一緒に愛について考えさせられます。物語の中で彼らは夢を追いかけて恋に悩んだり病氣と闘ったりなどそれぞれの問題に立ち向かっていきます。この冒頭のシーンは舞台とは異なる映画独自の演出です。またロケーションの多様性の他にも映画だからこそこできる演出が多数存在します。例えばモリー（イディナ・メンゼル）に想いを寄せるマークとジョアンナ（トレイシー・トムズ）が歌い踊る「Tango Maureen」では抗議ライブの会場から一転、マークの想像の中へとカットが変わります。衣装を纏って踊る二人は他の男性と踊るモリーを目で追い続けます。この場面展開があるからこそ浮気者のモリーに対する嫉妬や苦悩が画で表現され

ているように思います。他にも電気を止められた住人達がボスターや脚本を燃やして暖を取るシーンや集会のメンバーが次々に命を落として彼らの姿が消えていく場面など舞台上では表現しがたいシーンは数えきれません。

「RENT」のテーマは愛と生きることについてなのではと解釈しています。登場人物の何人かはHIV感染者で薬を服用してはいるもののいつ命を落とすかわからない恐怖に怯えながら夢を追いかけて生きています。その中の一人エンジェル（ウィルソン・ジャーマイン・ヘレディア）は「ライフサポート」という会を開いています。物事を前向きにとらえることができる彼女率いる「ライフサポート」ではエイズで苦しむ人々が自分の病状について話し合い、互いに勇気付けるために集まっています。そこで彼らが歌う「Life Support」では「あるのは今日という日だけ」とその日を精一杯生きることの大切さについて語られています。自分もエイズ患者であるにも関わらず周りを元気づけ、日々を笑顔で過ごす彼女の人生が仲間たちの心を動かしていきます。エンジェルがくれる「No day but today」というメッセージと「RENT」の若者たちが必死に生きる姿は、観客である私たちに世間の事実を訴えかけると同時に自分自身について考えさせる力を持っています。映画のクライマックスではマークが完成させた映画「Today 4 U」を仲間そろって鑑賞します。そこには彼らの愛で計った一年間が映されています。

### ③魔法にかけられて（2007年十一月）

アニメーションと実写を組み合わせたディズニー映画「魔法にかけられて」。古くから人々に愛され続けるプリンセス映画を思い出すような場面がふんだんに盛り込まれたミュージカル映画です。おとぎの国アンダーレーシアに住む女の子、ジゼル（エイミー・アダムス）は白馬に乗る王子様エドワード（ジェームス・マースデン）と出会ってすぐに婚約します。翌日チャペルに向かうジゼルは悪い魔女に騙されて不思議な井戸に落ちてしまい、落ちた底で見つけた光の世界へと導かれます。そこに広がっていたのはジゼルを助けてくれる人などいない現代のニューヨークの街。ニューヨークで王子様が迎えに来られるのを待ちながら現実世界で過ごすうちに真実の愛を見つけるという物語です。

映画の始まりはアニメーションの世界から。この映画が公開された二〇〇七年にはコンピュータグラフィックスで描かれるアニメーションが主流となり始めていました。近年公開されたディズニーピクサーの映画「アロと少年」の豊かな自然の描写は実写なのではと思ってしまうほどに美しくリアリティを感じたものでした。そんなCGアニメーションとは異なり、「魔法にかけられて」では冒頭約十分間のアンダーレーシアのシーンはすべて手描きにより描かれたものです。人の手により描かれると線も色もやわらかく、CGアニメーションとは一味違った暖かみの溢れる世界が広がっています。このアナログ手法によつ

て描かれたアニメーションと実写のシーンとで物語にいいコントラストが生み出されています。過去のディズニー作品の「メリー・ポピンズ」や「ロジャーラビット」などもアニメーションと実写を融合させた作品ですが「魔法にかけられて」では〇を使った演出が隠されていたり、ジゼルとラゴンもCGアニメーションになってニューヨークに登場したりと〇〇をアンダーレシアの魔法として使用しています。

作中の素晴らしい楽曲たちはディズニー黄金期と呼ばれる「美女と野獣」、「リトル・マーメイド」、「アラジン」などを作曲したアラン・メンケンと、彼とともに数々の名作を手掛け、ブロードウェイミュージカル「ウィキッド」の作詞作曲を担当したステイヴン・シュワルツにより生み出されました。魔法のような楽曲たちの中でも私のお気に入りにはセントラル・パークで繰り広げられる「That's How You Know」というミュージカルナンバー。見知らぬ土地ニューヨークで困っていたジゼルを助けたロバート（パトリック・デンブシー）に向かってジゼルが愛する人に思いを伝える大切さを歌い踊ります。映画の中で最も華やかでハッピーな曲で、ジゼルの歌と振る舞いによって魔法にかけられたアーティストや公園で過ごす人々が次々にバレードへと加わっていきます。

この作品では今までのおとぎ話の世界で当たり前だったことをニューヨークでは通用しないとし、その要素をコメディイとして取り入れて

います。ジゼルはお城や王子様を必死で探すことで人々に白い目で見られたり、歌で呼び集めた汚いネズミやゴキブリと一緒に掃除したりとディズニーが自ら作り上げてきたファンタジー像をネタにしています。また物語と現実の違いを活かし、物語が進むにつれて変化していく登場人物の様子も表現されています。特に印象的なのは最後の舞踏会のシーンでのドレスデザイン。ロバートや他の参加者は舞台衣装のような古風かつ華やかな服装で踊っていますが、ジゼルだけはモダンで洗練された印象のマーメイドラインのドレスを纏っていて、ニューヨークで過ごした三日間で彼女に変化が起こったことが窺えます。

過去の王道プリンセス映画とは一味違う作品ですがディズニーがいつも私たちに伝えてくれる「夢はかなう」というメッセージは変わらず組み込まれています。本作の軸となる愛についても、ジゼルが真実の愛は魔法よりも強い力を持つと信じ続けていたからこそ周りの人々を自然と笑顔にでき、夢や永遠の幸せなんて絵空事であると思っていたロバートの心を開くことができたのではないのでしょうか。物語の最後にはジゼルが真実の愛を見つけただけではなく、お裁縫という特技とセンスを生かしファッションブランドを立ち上げ現実社会で生きていくという結末もこの映画を好きな理由の一つです。「魔法にかけられて」は登場人物たちが幸せになり、私たち観客の心にも魔法をかけてくれるハピネス溢れる物語です。

趣味は映画観賞であると言えるほどの作品数を観たわけでもなく、観るジャンルも偏っていますが、好きになった作品たちには少なからず影響を与えられています。映画館でわくわくしながら新しい作品と出会い刺激を受けること、また気に入った作品を観かえして好きなものを好きだと感じたりいつか味わった感動にまた再会したりする幸せな時はとても楽しいです。ただそんな一瞬の娯楽的な楽しさだけでなく映画を通じて自分の世界の色が変わったり、物事を違う角度から見ることでできたりと私自身を成長させてくれるような力を持つのが私にとっての映画です。